

小さなボーイフレンド

松井順子

秋田県・五七・主婦

明るいワインレッドのオーバーを着て、同色のフェルトの帽子をかぶり、黒い革靴のボタンをパチンとはめると、おでかけの準備ができました。そう、今日は、たかふみちゃんのお誕生日におよばれの日なのです。

今から五十数年前。上海での初冬のある日。ほのかに香^{かほ}しい空の匂いに、近づきつつある冬の気配が感じられました。

たかふみちゃん、今どうしておられますか。お元気でいらつしやいますか。

私の家の方が幼稚園からは遠いのに、毎日迎えに来て下さいました。いつも二人仲良く幼稚園に通いましたね。

白いセーターに、グレイのフラノの半ズボンをはいた姿が、明るい朝の光の中に立っている。だが、顔はどうしても思い出せない。日本への引揚げの折り、一枚の写真も持ってくることは、許されなかったからです。

でも、あの頃の上海は、戦争中の大都会ではあっても、表面はまだのどかでした。たかふみちゃんのお家から頂いたカナリヤは、私にもよく馴れて、カステラや羊羹と一緒に啄んでいました。

やがて国民学校へ行く頃から、徐々に戦争は激化し、たかふみちゃん御一家は日本へ帰国、私達は叔父を頼り北京へ疎開しました。昭和二〇年春のことでした。飼っていたカナリヤを空に放ち、おひな様は飾ったまま、今なお涙のこぼれる程なつかしい上海を後にしました。カナリヤは小さな翼を広げ、青空にくっきりと黄色い飛翔の姿を残し、飛び去って行きました。

たかふみちゃん、あれからもう、五〇年もたってしまいました。きっと、お父様と同じように、優しくて立派なお医者様になっておられることでしょう。

「小学校の運動会 君は一等 僕はビリ」と、あの歌を御一緒に歌ってみたいものですね。

*うすれてゆく追憶の中で、ぼうっと……幼い私達が一緒に遊んでいる。涙なしには思い出せないなつかしい上海と共に幼友達を偲んで。